

JR東日本カップ2006第80回関東大学サッカーリーグ戦(後期)第14節



悔しさを隠さず会場を後にする巻(左)、右は同じく筑城
(撮影 斎藤 卓也)

駒澤大学 2x3 明治大学 崩れ落ちたイレブン

後 期 初 黒 星

試合終了のホイッスルがなった瞬間、駒大イレブンは奈落の底に突き落とされたかのようにピッチ上に崩れ落ちた。主将廣井が地面を蹴りつけ、倒れこんだ小林がピッチを2、3度おもいきり手で叩きつける。そして選手たちは試合後、一言も発さず足早に競技場を後にした。見たことのないイレブンの姿だった。そしてこの日何が違った…

セットプレーのこぼれ球から明大に先制点を許してしまうも、失点後、駒大らしい縦への速い攻撃が明大を翻弄。12分、セットプレーのこぼれ球を阿部が中へ放り込み、菊地が頭ですらす。それに待ち構えていた廣井がヘディングシュートを叩き込み同点に。さらに19分、塚本のCKをまたも廣井が競り勝ち逆転。駒大のいい部分ばかりが際立つ前半だった。

だが後半、1つのプレーで流れが豹変する。48分、明大に右サイドを崩され、ペナルティエリア内で相手を倒しPKを謙譲。そのPKを後期3得点1アシストと絶好調の主将小川が決めて同点に追いつかれてしまう。そこから徐々に痛手になった。それに追い討ちをかけるかのように筑城がプレー中に負傷。だがプレーが中断されず、そのまま明大の攻撃が続く。筑城がいないサイドからのクロスを橋本がヘッド。三葉がなんとかはじき出す。ゴール前に詰めていた小川が落ち着いて右足を振り抜き、ネットを揺らした。まさかの逆転弾！失点後、高崎、巻のツインタワーにロングボールを放り込み好機を見出そうとするも明大はDFライン高く保ち、形を作らせない。そしてそのまま終了のホイッスルが鳴ってしまった。秋田監督は「前からボールをなかなか追えなくて休む時間が多い」とチームの状況を嘆いた。足早に競技場を後にした選手たちの表情は今まで見たことがない危機迫るものであった。2位の流通経大が敗れたため首位はキープした駒大だがこの試合では幾度となくタイトルを獲得してきた老練な姿はなかった。シヨクさえなければ大丈夫だと思いが、「(秋田監督)と話そうに選手たちのメンタル面も気がかりとなる。この敗戦が尾を引かなければいいが…」

林 雄大